名古屋女子大学　紀要　49（人・社）　307～320　2003

『名所句集』の宗碩

余語敏男

はじめに

二条良基は「名所連歌は第一大事也。何(いか)にも句の中に心を入て、名所に作なすべき也」（『擊蒙抄』）と述べる。[1] 梵灯庵には『独吟名所百韻』があったとされ、[2] 宗祇には『独吟名所百韻』二巻がある。名所を詠むことははやくから重視されながら、名所句の撰集は『名所之連歌』が唯一である。この本の巻末に平川章甫の識語があり、「此水無月の末つかたはからさるに名所連歌集古写本十冊ある人のもとよりかり得て」と記す。連歌集書本三冊の題簽には「名所句集上中下」とあり、上冊の内題には「名所之連歌第一」とある。章甫の借りた本には定かな書名もなかったと思われる。重松裕巳氏はこの三冊を翻刻し、付合、作者別部立別入集句数、成立について解説され、『名所句集　古典文庫第四七六冊』として刊行された。その後、この句集の成立、編者についての論究を見ない。

重松氏は「見すやあらぬいく船道のふしの雪」の句が『宗長日記』享禄三年（一五三〇）十一月七日条に記されるのを見出し、成立は同年同月十(ママ)八日以後、編者は「宗長に極めて近しいもの」と結論された。入集作者十二人の中で最も後出の作者は宗碩である。重松氏は「宗碩の作品で詠句年次が明らかな一句は、永正十七年（一五二〇）正月六日詠なのでここでは問題でない。」とされた。『名所句集』に宗碩は六〇句入集する。（一）六〇句の選句資料調査によって句集成立の手がかりは得られないか。（二）宗碩は名所句をどのように考えて詠んだか。この二点を中心に据えての小考である。

一　「名所」の付け方

『連理祕抄』に「ことなる用なき時、努々(ゆめゆめ)出だすべからず」「詮なき名所ゆめ〳〵停止(ちやうじ)すべし」とある。[3] 名所の知識の羅列になることを戒めている。『九州問答』では「須磨ノ山里」に「高塩」を付けてよいか、の問に、「高塩、山ニハノキタル様ナレドモ、句柄ニ随ヒテ上手ノ取ナサンズルニ、山ニノク事アルベカラズ、トテモ須磨ノ事ニテ侍バ、何カハ苦シカルベキ」と答え、「凡上手ノ連歌ハ、ノキタル様ナレドモ心ガ面白ク寄合ナリ」という名言が生まれる。[4]

『吾妻問答』は「名所の句をする時、其の名所の寄せ候はでは悪しく候。一句に詮なき事など侍るは見苦しく候。たとへば、吉野には花・雪などをそへ、立田には紅葉・鹿などをいひ、弓槻(ゆつき)が嶺(たけ)には雲をそへ、浅間山には煙をそへなどする事なり」と述べ、「寄せ」を説く。[5]『三湖抄』に「名所にハかならず読たる道具を案じて付へし。うかと名所にハ付ぬ者也。…浦の名所ならバ水辺(すいへん)の道具、山の名所

ならバ山類のさし出ぬ道具にて付べし。」とある。[6]「寄せ」として働く特有の景物を指して具体的に「道具」と言う。

「寄せ」「道具」を学ぶための本がはやく鎌倉時代から編まれていた。冷泉家蔵『草子目録』の連歌の項に名所の付合に関する五種の書名が見え、その中に『諸国名所歌枕』がある。[7]これに続いて『八雲御抄』巻第五名所部、時代は下って『名所方角抄』『随葉集』巻第六名所部、『竹馬集』巻第六名所之部、『名所付合』松平文庫本[8]等が伝存している。さらに広く「日本紀・風土記は国の名所のおこりなど書きたる物」「源氏物語・伊勢物語・古今集以来代々の撰集、名所の寄合などやうの物」[9]も知識の源泉として必備の本であった。

名所は式目の規定に従って付ける。『連歌新式』（応安五年（一三七二）成立。長谷寺本[10]）の一座二句物の中に名所の景物は「岡（只一名所一）　故郷（只一名所一）　池（同前）　湊（同前）」の四つが見える。『連歌新式追加并新式今案等』（文亀元年（一五〇一）成立。太宰府天満宮本[11]）に定める一座二句物の中の名所景物は「故郷　岡　池　湊　嶺　海　野辺　小野（一は名所たるべし。）」の八つ（注記は「小野」の注記のみ記し、他は略す）である。四つが追加され、順序を変えている。『連歌新式拾蛍抄』（寛文十年（一六七〇）頃成立か。書陵部本）の一座二句物の中には（注記は一部略す）、

故郷（普）　岡（普）　池　湊…　嶺（肖　雖為名所可為二之中）　只ノ岑二モ有　海（肖　只一名所一わたつうミなと又別にあるへし）　ワタツミモ海也ワタツウミモ同事也　海若（菩海）　海底（同）　ワタツミ過テワタツミノカサシナト竜神ノ事ニシテモナシ　和田原トモアリ…　野辺（肖）二ッ有　小野（一ツハ可為名所）　小野ノ事也小野ハ名所ニ一只一也

とある。「海若」「海底」「和田原」が加わり、注記は格段に詳しく、懇切になる。肩付注記「普」（後普光園院二条良基）、「肖」（肖柏）を付し、式目改訂者の名を顕している。

（二）

二　「名所」の生成

「歌枕」という用語は「歌詞の注釈、枕詞、名所解説、歌題もしくは景物」と多様な意味に用いられて紛らわしい。[12]連歌では必ず「名所」の語を用いる。先にあげた『諸国名所歌枕』という書名は熟慮した末の命名であろう。名所はどのように生成されるかを二つの手がかりを得て考えてみる。先ず『歌枕名寄』巻第廿五　美濃国「野上」の項である。[13]

野上　今案云万葉歌未必名所歟　後世歌当国詠之

万霞　鶯

霞たつ野上のかたにゆきしかはうくひすなきつ春に成らし

この歌は『万葉集』巻第八　丹比真人乙麿の作で、頭書するように霞と鶯を詠む。注記は、この歌がまだ必ずしも名所歌になっていない、という懸念である。その理由は、この歌は霞と鶯を詠む叙景歌であって、東山道の宿駅としての土地柄を詠んでいないからであろう。「後世歌」に詠まれるのは野上の宿であった。すでに、定家は宿駅としての野上を詠んでいる。

寄傀儡恋

八九七　ひと夜かすのがみの里の草枕むすびすてける人の契を

（『拾遺愚草上』）

万葉歌「霞たつ野上」は現在「野の上」と読まれ、地名とは考えられていない。当時も訓読が定まらないという懸念があったかも知れないが、『歌枕名寄』の他の例歌二首（後法成寺家歌合、新撰和歌六帖各一首）も鶯の歌である。

次に『歌枕名寄』巻第三十八　未勘国下「琴浦」の項である。例歌は一首、

琴浦　　仲正

春風に波のしらふることのねはかもめのあそふところなりけり

である。この歌は初句「まつかせに」、第三句「ことの浦」として『夫木和歌抄』に見える。[14] 前書に「家集、ことのうらといふ所にて」とあり、前書に注記して「ことうら、未国」とある。仲正は永長二年（一〇九七）肥前権守、永久ごろ下総守と知られるから、平安後期に「ことの浦」という名所があったことは確実である。『新古今和歌集』巻第四　秋歌上に、

宜秋門院丹後

四〇〇　わすれじな難波の秋のよはのそらこと浦にすむ月はみるともがあり、『拾遺愚草上』「忍恋」題の、

三九五　こと浦にころやしほ木の名にたてよもえてかくれぬ煙なりけり

がある。いずれの「こと浦」も「異浦」の意に解されている。[15]

『菟玖波集』巻第四　秋連歌上に、

月影も所からにそかはりける

三〇一　ことうらよりも難波江のあき　　左近中将義詮

がある。この「ことうら」も「異浦」の意にのみ解されている。[16] 当代になると『沙玉集Ⅰ』に一首、『草根集』に二首、『雪玉集』に一首と「こと浦」を詠む歌が増える。『草根集』の一首に、

浦伝千鳥

五四四　蘆そよぐ難波のみつの塩こえてこと浦風に千鳥なくなり

とある。「こと浦風」は「よそ（遠く）の浦を吹く風」ではなく、「すぐ隣りの琴の浦を吹く風」の意である。『大日本地名辞書』に「摂津志　新田の南なる大坂港の一部を以て琴浦（コトウラ）と為す、琴浦一に異浦に作る。」とある。琴浦は現在の尼崎市琴浦町、蓬川河口にあたる。[17] 蓬川河口、中島川河口、淀川河口は西から東への並びである。

『新撰菟玖波集』巻第十二　羇旅連歌に、

なにはの事もたゝ夢の中　　藤原光傳

三三一　こと浦にうつるもしらす船にねて

がある。[18] 船が「こと浦」に移動するのは僅かの時の間である。『名所句集』には、

難波かた月寒きよをうかれきて

五九九　ことうら千鳥つまや恋しき　　宗碩

がある。『宗碩連歌合』五十二番左の句を入集させている。判詞に「ことうら千鳥つま恋哀浅からす」（二類本　太田武夫旧蔵本）とある。『随葉集』巻第六　名所部には「難波」に付ける語の一つとして「千鳥」をあげる。[19]

「こと浦」は「こと（琴）の浦」から「異浦」へ転じ、やがて名所「琴浦」として定着する。

三　名所千句・名所百韻の展開

〔一〕『異体千句』　賦建保百首名所　連歌　第六

康正二年（一四五六）八月成立。源意独吟。島原松平文庫本翻刻『古典文庫第四一三冊』に拠る。巻首巻尾の各三句は、

一　雨木の葉をとはかはらぬ霧まかな

二　千草の露や玉しまかはむ

三　蛍とふ野沢の水の秋きえて

六　かりねの夢のあふさかへるさ

九　あとになる都の名残をしほ山

一〇〇　よそにふけゐの舟のうら風

である。百首の題の季、部類と違えて詠む。春「音羽河（山城）」、春

「玉島河（肥前）」を秋に、夏「美豆御牧（山城）」を秋に変え、雑「会坂山（近江）」、雑「吹飯浦（和泉）」を旅に、冬「小塩山（山城）」を旅に変えて詠む。巻首三句は秋、巻尾三句は旅である。国名も巻首、巻尾で照応しない。挙句に祝言の意はない。一条兼良の序に「建保の百首の名所を結ひかくされたり」とある。本百韻は、名所を詠み込む試みであった。

〔二〕『名所連歌』

寛正五年（一四六四）正月朔日成立。連歌合集本に拠る。宗祇独吟。発句は専順である。この発句は『竹林抄』巻第十　発句の部の巻頭句で、前書に「春立ける日」とある。『新撰菟玖波集』巻第十九

発句上では巻頭第二句めの位置に置かれ、前書に「名所にてひとり連歌し侍しに」とある。全句の句頭に国名を注記する。巻首巻尾の各三句は、

一　大和　花の春たてる所やよし野山　　専順
二　同　しら雲いつこかすむかつらき　　宗祇
三　同　あすか川夕日の波に雪きえて　　同
六　山城　かものかハらハきりそまかへる
九　山城　岩もとの社しつかに月ふけて
100　大和（江にも）　手向の山の秋のハな〳〵

である。発句と挙句が大和の吉野山と手向山、巻首が春三句、巻尾が秋三句で照応する。「岩もとの社」は上賀茂神社の摂社である。[20] 挙句は「手向の山を今日越えて」という大伴坂上郎女の歌（『万葉集』一〇一七）に拠って岩本社に付けた神祇の付句である。

〔三〕『於品川宗祇独吟名所百韻』（内題）

文正二年（一四六七）正月朔日成立。書陵部本翻刻『桂宮本叢書第十八巻』に拠る。発句は宗祇の句で、『萱草』第一春連歌に「おなしき毎年の独吟にあつまにて」と前書して入集する。『宇良葉』春の部の冒頭二句めに「あつまに侍し時、正月一日獨吟に」と前書して入集する。巻首巻尾の各三句では、三、六の二句のみ句頭に国名を注記する。

一　冨士のねも年はこえける霞哉
二　末とをく立むさし野の春
三　大和　若草は枕かすかの里にねて
六　大和　ふかきいもせの山中の雲
九　咲花の高野のおくは暮やらて
100　春日にあかき丹生の神かき

巻首は東国二句と大和、巻尾は大和二句と紀伊で照応する。挙句は東吉野村の丹生明神への祈願であり、神祇句である。

〔四〕『名所百詠　全』（内題「名所百員　宗祇」）

内閣文庫本は「文明　十二月於清水寺」と頭書するが成立年次を欠く。この百韻は従来、梵灯庵独吟とされてきた。梵灯庵は永享五年（一四三三）以前に没し、その二十数年後に『異体千句』が成立する。『異体千句』第六名所連歌とこの『名所百詠　全』とを比べる限りその違いは大きく、梵灯庵活躍期の賦詠とは考えられない。以下に記す観点から、宗祇が『筑紫道記』の旅を終えた文明十七年（一四八五）頃の成立と考える。

(1)　伝本五本の中、内閣文庫本、大阪天満宮文庫本（れ・甲2）、東北大狩野文庫本の三本には「於清水寺」とある。[21] これは、文正二年宗祇独吟の「於品川」と同じ形式である。

(2)　宗祇の「毎年の独吟」は正月朔日の百韻二種が残る。「於清水寺」独吟には「十二月」とある。年のわたりの独吟として相通ずる。

(3)　寛正五年の名所独吟は挙句の前句に上賀茂神社摂社岩本社を詠

み、文正二年の名所独吟は挙句に丹生明神を詠む。「於清水寺」独吟では第九八句に箱崎の神を詠む。巻尾の神祇句詠が相通ずる。

(4) 第九八句と第九九句の付合は、文明十二年筑紫下向の旅の体験に基づくか、と思わせる。「なきてたに」は「泣(鳴)きて」に「凪ぎて」を掛け、海面を眺望する感がある。『筑紫道記』に「御社の正方は戌亥にて、志賀の嶋にむかへり。…遠近の嶋々、所々の山々など手にとるばかりにて、いづれも名所ならずといふ事なし。」とある。[22]「箱崎」「志賀の嶋」はいずれも『歌枕名寄』に見える。

一 山城 月に降時雨や風の音羽山
二 近江 ちらぬ紅葉に逢坂の関
三 同 志賀の浦松一木にハ冬しらて
七 山城 かハらぬハ北野筑紫の誓にて
八 筑前 こゝに名高き箱崎の神
九 同 なきてたに帰る方なき鹿の嶋
一〇 大和 幾秋きぬる猶三笠山

発句・脇句は清水寺に因む都の東方の名所である。巻首の山城「音羽山」と近江二句に照応して、巻尾は大和「三笠山」と筑前二句である。挙句は「鹿」に付けて春日大神を讃えている。

〔五〕『名所千句 全』

永正元年十一月成立。宗麟独吟。内閣文庫本翻刻の『古典文庫第四六七冊』に拠る。第一発句は「音羽山」(山城)、第二発句「芳野山(大和)、第三発句「生駒山」(河内)を詠み、春三句である。第四・五は「神路山」(伊勢)、「木枯の杜」(駿河)を詠む夏二句。第六・七・八は「から崎」(近江)、「野上」(美濃)、「後瀬山」(若狭)を詠む秋三句、第九・十は「明石」(播磨)、「香椎潟」(筑前)を詠む冬二句。四季題千句の形式として整っている。

各巻の挙句の付合は一般の名所を詠む巻が多いが、四つの巻は次のとおり、祝言・神祇となる名所を詠んでいる。第一 九九「神山」(山城)と一〇〇「長坂」(山城)を詠む祝言句。第二 九九「磯城嶋」(大和)と一〇〇「神岳山」(大和)を詠む祝言句。第四 九九「小笠原」(甲斐)と一〇〇「酒折の神」(甲斐)を詠む神祇句。第九 九九「神の小浜」(未詳)と一〇〇「御座浦」(土佐)を詠む祝言句。名所千句の半ばの各巻の挙句に祝言・神祇を詠み、千句の形式は整ってきている。千句の興行目的は跋文の表現に窺える。

千句之事度々承候名所者勅撰名寄八雲御抄其外家々に集め置るゝ所に書つき侍由数度辞申といへとも大部の書えらひ出る事煩敷聚韻のためしまて引出され強而御所望の間こと〳〵く誹徊の躰を以て句に結連候 (下略)

「大部の書」は諸国の名所とその例歌を集めた歌枕書を指す。宮脇真彦氏は解説で「名所歌集の系列においてとらえる必要」を指摘された。「誹徊の躰」は句の仕立てに用意が乏しく、表現は俗である、の意であろう。次の三句は珍しい例歌の歌句をそのまま用いている。

一〇 伏見のむらは誰かよふらむ
一一 くみあくる井手の中道袖(はへイ)みえて
一二 山吹のせは夏としもなし (『名所千句』山城国第一)

「伏見の里」が歌句であって「伏見のむら」は勅撰集、『平安和歌歌枕地名索引』の例歌に見えない。[23]「井手の中道」は『新後拾遺集』六四「山しろの井手の中道ふみ分けて」が一首だけ勅撰集に見える。「山吹のせ」は『新拾遺集』一八二「ちりはつる山吹のせに行く春の花に棹さすうぢの川長」(『歌枕名寄』の例歌)が勅撰集中唯一である。『歌枕名寄』の例歌は、

見わたせはふしみのむらの夕かすみ誰かへるさの道まよふらん
人しれぬこゝろへたつないはてのみとし月すくるゐての中道

である。

〔六〕『賀茂社法楽宗牧獨吟名所百韻』

天文十四年（一五四五）以前成立。続群書類従本に拠る。全句頭に国名を注す。名所は山城二五、大和、近江各九、摂津八、紀伊六となり（以下略）、賀茂神社ゆかりの山城が特別に多い。

一　山城　波のおと木するゐもせみの小河哉　　宗牧
二　同　夕かせ涼しかたをかの森
三　同　日影山あき行袖に移ひて
六　山城　この橋本の秋の初かせ
九　同　神山やしめゆふ花の露かけて
一〇　同　あふけ紅の朱の玉垣

「かたをか」「橋本」「神山」は上賀茂神社の名所、「せみの小河」「紅の朱の玉垣」は下鴨神社の名所である。巻首巻尾は山城各三句の照応である。挙句は下鴨神社祈願の神祇句である。名所独吟の風が展開して法楽百韻という形式にまで整ってきたことを示す。

四　『名所句集』と宗碩句

『名所句集』の成立について木藤才蔵氏は「大永四年三月十七日～廿一日伊庭千句興行、この千句以後」とされ[21]、重松裕巳氏は享禄三年十一月十八日以後とされた。以下の調査によって、大永四年から享禄三年に至る六年間にほぼ成立するのではないか、と思われる。

宗碩の句は『名所句集』に六〇句入集する。句集の部類別では雑一九句（三二％）、恋一一句（一八％）、春九句（一五％）、の順（下略）。国別では大和一四句（二三％）、近江一二句（二〇％）、山城は僅か七句（一二％）、摂津六句（一〇％）の順（以下略）となる。八・九頁の**（表）宗碩句の名所一覧**は名所を国別に整理し、名所の句表現を添え（表記は『名所句集』）、選句資料欄には入集句の所在位置を示した。選句資料別の入集句数は次のとおりである。

何衣百韻	（永正十年成立）	一句
住吉千句	（大永元年　〃）	七句
伊勢千句	（大永二年　〃）	六句
宗碩連歌合	（大永三年本）	二四句
伊庭千句	（大永四年成立）	二〇句
未詳		二句
	（計）	六〇句

各選句資料と『名所句集』との本文の異同、選句の状況は次のとおりである。

〔何衣百韻〕永正十年二月十六日興行。

前句、付句とも異同がある。百韻（大阪天満宮本）は次の句形であった。

とくる氷に志賀のうら浪　　肖柏
霞ふく比良の根颪（わたし）春かけて　　宗碩

「ひらの根颪」の表現は「宗牧独吟賀茂社法楽百韻」にも見える。「ねわたし」の語は道因法師の歌（『千載集』巻第六　冬四一〇）に見える。

あらしふくひらのたかねのねわたしにあはれしぐるる神無月かな

「ねわたし」を春の季として付けるのは異例で、一時、坂本に住んだ宗碩の体験によるか、と思われる。句集では前句「とくかこほりに」、付句「ひらのねわたり」となる。

〔住吉千句〕大永元年十一月一日～四日興行。

千句（連歌合集本）の句形と句集の句形との間に異同はない。この千句に宗碩の名所句は三五句あるが入集は七句であった。次の四句は入集しなかった句である（漢数字は百韻の順、算用数字は句番号を表す。以下同）。

おもへともいつあふ坂もまたしらて　雪
三32　音羽の山のをときくもうし　宗（住吉千句）

むらさきのゆかりもまれの身の行末　雪
三90　われのミいくかむさし野ゝ原　宗（　〃　）

しるらんものと神をあふかん　雪
五49　春日野やたのむ下草からすなよ　宗（　〃　）

老ぬるハ子日もしらぬ松なれや　雪
十42　いくへつもれる雪のかすか野　宗（　〃　）

次の句は他の千句で右と同じ名所を詠んで入集する。

九重にさく明ほのゝ花　長
八49　音羽山こすゑの上のかすみきて　碩（伊勢千句）

関まてとをくられこしを名残にて　雪
三22　あとは音羽の山ほとゝきす　碩（伊庭千句）

露のなこりをいつく尋ん　長
一95　むさし野や入さもしらぬよはの月　碩（伊勢千句）

かきりたにある思ひともかな　雪
四77　むさし野といへはしらぬもなつかしみ　碩（伊庭千句）

常よりもけふのまつりの人おほみ　長
八26　のとかなる世のかすか野の春　碩（　〃　）

〔伊勢千句〕大永二年八月四日～八日興行。

句集八一七「いとゝふまるゝあしそ（ママ）らの山」は千句二本では次の句形であった。

玉ほこの道の別に行やらて　長
九94　いとゝふまるゝ足からのやま　碩（内閣文庫一本）[25]

玉ほこの道のわかれに行やらて　長
九94　いとゝふまるゝあしたらの山　碩

あしうらの山名所也。道の別に行やらて、あしうらをふまるゝ也。いつかたにふみ定むらん足浦の山、と云古歌也。　（内閣文庫付注本）

「古歌」は藤原定頼（九九五～一〇四五）が和泉式部に詠みかけた歌である。定頼が小式部内侍に詠みかけた『金葉集』の歌と対を為す。

藤原保昌朝臣丹後になりてくだりけるに、和泉式部おもひわづらふと聞きてつかはしける　権中納言定頼
八二五　ゆきゆかずきかまほしきはいづかたにふみさだむらんあしのうらやま　（『続古今和歌集』巻第九　離別歌）

『定頼集』の前書には、

式部がやすまさがめになりて、たんごになりたるに、いきやせまし、いかゞせましといふときてやりたまひける

とある。保昌に従って下向することを、式部が思い迷っている時の贈歌であった。歌の第五句は「あしうらの山」とある。『歌枕名寄』と『勅撰名所和歌抄出』[26]とはいずれも「あしうらの山」である。『藻塩草』には「門に出立足うらして　足占山（名所也）」とある。[27]足占山は京都府中郡峰山町と大宮町の境にある磯砂山（いさなごやま）である。[28]

入集する他の五句は千句二本の句形と異同はない。この千句に宗碩の名所句は三六句あるが入集は六句であった。次の句は入集しなかった。

田蓑の嶋の舟の行すゑ　長
三95　浦とをく見えたる月の難波かた　碩（伊勢千句）

〔表〕宗碩句の名所一覧

部類	国名	句番	名所とその表現	選句資料
春 第一	大和	三	**ミよし野**……かすまハ	連歌合一番左
	〃	七五	陰に……**若草の山**	伊庭千句八・九三
	〃	三七	花に**伊駒**の明ほの	連歌合七番右
	〃	一九一	今そ……**藤ハらの里**	住吉千句三・六四
	山城	二	**音羽山**……霞きて	伊勢千句八・四九
	〃	一九二	**井手**の山吹	住吉千句五・五六
	〃	二〇七	**小倉**の梢春くれて	連歌合二〇番左
	近江	一四三	花その……**まの**ゝ浦風	住吉千句九・三四
	未勘	七六	**あしわかの浦**めつらしき	伊庭千句六・八一
夏連歌 第二	大和	二六一	夏衣**さほの川原**	伊庭千句二・五七
	〃	二九九	ならのは……**片岡の里**	連歌合二九番右
	山城	三二五	**音羽の山**ほとゝきす	伊庭千句三・三三
	〃	三三九	露かゝる**伏見**の夢	連歌合二五番右
	播磨	三三四	時鳥**明石**のとなミ	〃 二四番右
	淡路	三六九	扇にも**絵嶋**の心	〃 二九番左
秋連歌 第三	山城	三三八	**西川**の秋の三日月	連歌合三九番左
	〃	三九七	照月の**かつら**	伊庭千句二・六三
	摂津	三八七	**長柄の橋**のよハの月	〃 九・三
	〃	四四〇	**長洲**の鷗打さハき	〃 二・八一
	武蔵	四一三	**武蔵野**……よハの月	伊勢千句一・九五
	筑前	三六八	月に……**袖のミなと**	伊庭千句二・三
	未勘	三三七	秋の**ゆふは河**	〃 九・八五
冬連歌 第四	未勘	五三九	**ことうら**千鳥つまや	連歌合五二番左

部類	国名	句番	名所とその表現	選句資料
旅連歌 第五	常陸	六六六	しくや**かしま**か磯	住吉千句四・七四
	相模	六五七	**足から**や駒うちよする	伊勢千句五・二九
	美濃	六二七	あはれ**野上**の月	〃 六・九三
	近江	六〇五	**相坂**や……関越て	住吉千句五・四五
恋連歌 第六 上	近江	七五六	歎きのミ……**逢坂**	連歌合六一番右
	〃	七七一	行衛も**いさや川**	〃 七〇番左
	陸奥	七六四	我**あふくま**ハたゝ	〃 六一番左
	武蔵	七九一	**武蔵野**……なつかしミ	伊庭千句四・七七
	伊勢	七六四	たゝ**なミた川**	連歌合六一番左
	大和	七八五	たのミも……**初セ山**	伊庭千句四・二九
恋連歌 第七 下	駿河	八四七	袖ハ**きよミかセき**かねて	伊庭千句九・九一
	伊勢	七九六	人心**二見の浦**の松	未詳
	摂津	八一三	**難波**のかた思ひ	連歌合七二番左
	丹後	八一七	ふまるゝ**あしそらの山**	伊勢千句九・四四
	播磨	八五〇	何うき恋を**餝磨河**	連歌合七九番右
	紀伊	八三〇	化波に**妹か嶋**舟	〃 七二番右
雑連歌 第八 上	大和	八六〇	朝けの霞**たつ田山**	連歌合一番右
	〃	八九二	**立田川**河辺の月に	伊庭千句二・九三
	〃	九七八	**さのゝワたり**の雨の日に	〃 三・七九
	近江	八六一	霞吹**ひらのね**ワたり	何衣永正十・二
	〃	九四二	**比良のね**……山風に	伊勢千句三・三五
	〃	八六二	故郷の**志賀津**の霞	伊庭千句十・三
	信濃	一〇〇九	もゆてふ**浅ま山**	連歌合九四番左

部類	国名	句番	名所とその表現	選句資料
	山城	一〇四六	なこり……**ありす川**	連歌合八七番右
	丹後	一〇六六	人も波の**うらしま**	住吉千句十・九
	摂津	九六二	**すま**のいにしへ	〃　十・七二
	播磨	九四六	波の……**いゑしま**	伊庭千句四・八六
雑連歌	大和	一二五	**春日野**の春	伊庭千句八・二六
第九下	〃	一二三	**葛城**……山ふミに	〃　三・五五
	〃	一二三	**金の御嶽**を契るらん	連歌合九三番左
	〃	一二三	水くミ**なつミ川**	〃　九八番左
	近江	一二三	**田上**や薪こりつむ	伊庭千句八・五三
	〃	一二四	**三井の寺**ふりて	連歌合九八番右
	摂津	一二三	故郷の**なにハ**	〃　八七番左
	〃	一二九	**住の江**……千木の	伊庭千句四・二三
発句	近江	一二四	雪や**大たけ**朝霞	連歌合一〇一番左
第十	〃	一二五	**あハ津野**……夏の海	未詳
	豊前	一四三	別てふ**もし**ハ関守	連歌合一一六番左

（備考）1　『宗碩連歌合』を選句資料とする二四句の中、次の九句は『月村抜句』を原選句資料とする。『名所句集』の句番号で記す。二二、七五六、七七一、八三〇、一〇四六、一一一二、一二三三、一二三四、一四一三。

2　恋連歌上は五句であるが、一句に名所を二つ詠む句があるので名所は六となる。

3　発句「雪や大たけ朝霞」は『宗碩連歌合』と『発句聞書』との両書に見える。

おもふともかなしかるへき旅居して　　碩

四14　なるれはさてもすまのうら波　　〃（伊勢千句）

同じ名所を詠む他の資料の句が入集する。

舟さすあまも袖ぬらせとや
古郷のなにハにつけてうらかなし
『宗碩連歌合』八十七番左（太田本）

なる神ハたゝ我うへのこゝちして　　雪
十72　おもふにかなしすまのいにしへ　　宗（住吉千句）

〔宗碩連歌合〕永正十七年七月十六日成立。

『宗碩連歌合』の伝本には成立時書写の一類本（富山県立図書館蔵志田文庫本他七本）と大永三年書写の二類本（太田武夫氏旧蔵伝守武筆本、静嘉堂文庫蔵連歌集書本）とがある。[注2]『名所句集』本文は二類本と一致する。

くるまひきよき行かたもなし
なけきのミ茂るあふさかかつこえて
『宗碩連歌合』六十一番右（太田本）

この句は『名所句集』に入集して去六番となる。車引、歎、逢坂、越と漢字を宛てるが異同はない。『宗碩連歌合』一類本（志田本）は前句「うし」、付句「なけきのミしけき」となる。他に、七十番左↓七二、八十七番左↓二三、九十四番左↓一〇〇九、九十八番右↓三三四、の四句も一類本と異同があり、二類本とは異同がない。

この句の判詞に「茂き歎の中を分らん彼帰京の様さなからの事にや」（二類　太田本）とある。『源氏物語』「関屋」の空蝉の歌「あふさかの関やいかなる関なれば繁きなげきの中をわくらん」に拠る付合である。

『宗碩連歌合』一類本と二類本と『名所句集』との間には次の異同がある。

(1)　二十四番右付句「鳴すきて」（一類　志田本）、「鳴過て」（二類　太田本）、「なき捨て」（二類　連歌集書本）↓「なき過て」

（『名所句集』三四）

(2)　三十九番左前句「われてなかるゝ」（一類　志田本）、「われてなかるゝ」（二類　太田本）、「ワれて流るゝ」（二類　連歌集書本）→「わきて流るゝ」（『名所句集』三八）

(3)　七十九番右前句「海になりぬる」（一類　志田本）、「うミになりぬる」（二類　太田本）、「海になりぬる」（二類　連歌集書本）→「海になり行」（『名所句集』八五）

(4)　九十八番左付句「法にたれ」（一類　志田本）、「法にたれ」（二類　太田本）、「法のたれ」（二類　連歌集書本）→「法にたれ」『名所句集』二三三）

右の調査から二つの点が判明する。（一）(1)(4)によって二類本の連歌集書本には拠らないこと。（二）(2)(3)によって、三八、八五の二句は入集の際に前句を修訂したこと。

〔伊庭千句〕大永四年三月十七日～二十一日興行。

『伊庭千句』（松井明之本。『古典文庫　第四七一冊』に拠る）と『名所句集』との間には二句に異同がある。

こたかくも二葉の花の春をへて　　長

八92　かけにおひそふわか草の山　　碩（伊庭千句）

『名所句集』五は「陰におふてふ」となる。「わか草」の意を強めるための修訂か。

富士こそたくひ身はをよひなし　　雪

九91　こえぬまの袖は清見かせきかねて　　碩（伊庭千句）

「たくひ」は同類の意で、こゝは高貴な身分の人を指す。

題不知　　平祐挙

三三　むねはふじそではきよみがせきなれやけぶりもなみもたたぬ　　ひぞなき

（『詞花和歌集』巻第七　恋上）

（一〇）

「けぶり」（富士の火による）と「なみ」（涙）は絶える日がない、という本歌に拠る付合である。『名所句集』八四は「しらぬまの」となる。その人を未だ「見知らない時分の」と修訂して「きよみ」を利かせようとしたか。

この千句に宗碩の名所句は三四句ある。この句数は『住吉千句』の三五句、『伊勢千句』の三六句と比べて殆ど同数である。『名所句集』への入集二〇句は他の二つの千句の入集句数の三倍に達する。大永四年前後に『名所句集』の選句が進行していたであろうと推定する。

この千句の次の句は入集しなかった。

霞つゝ駒にまかする山とをみ　　長

一22　たちかへりいつあふさかの春　　碩（伊庭千句）

あけ暮のさそ浦なみの都鳥　　長

八38　なにはにつけていにしへの跡　　碩（　〃　）

同じ名所を詠む他の資料の句が入集する。

われもそとりの声にたてつる　　雪

五45　あふさかやむかしをおもふ関こえて　　宗（住吉千句）

舟さすあまも袖ぬらせとや

古郷のなにハにつけてうらかなし

『宗碩連歌合』八十七番左（太田本）

古典文庫の解説冒頭に引用された宗碩の句は伊庭千句の句である。

一村の里はたく火にあらはれて　　雪

四86　なみのうへなるあまの家嶋　　碩

連歌集書本『名所句集　下』では「いゑしま」とある。

五　宗碩の名所句

宗碩の名所句六〇句の中に、名所を詠んだ前句に名所を付ける句

が八句ある。その中の「ことうら千鳥」「ひらのねわたり」「きよみかせき」の三句は先に扱った。残る五句の付合の方法を窺ってみる。

万代の春をよハふや春日山

一九一　今そさかりの藤ハらの里

「春日山」は春日大社の神山である。[30] 春日大社は藤原氏の創建になる。「藤はらの里」は『五代集歌枕』に見え、「ふぢはらのふりにしさとのあきはぎはさきてちりにききみまちかねて」（『万葉集』巻第十　三九三）をあげる。[31] この歌には旧都藤原京を懐かしむ心が見える。宗碩は、「今そさかり」と詠み、今も昔もの意を込め、「万代」に寄せている。

きゝつる須磨の浦にきにけり

二三四　時鳥明石のとなミなき過て

「須磨の浦」に付ける語に「明石」がある（『随葉集』巻第六　名所部292）。「あはしまにこぎわたらむとおもへどもあかしのとなみいまださわけり」（『万葉集』巻第七　一三六）に拠って付けたのであろう。

心とゝまる関ハあふ坂

六五七　足からや駒うちよする陰もなし

「あふ坂」に付ける語の一つに「駒」がある（『随葉集』巻第六　名所部303）。「関」と「駒」とから足柄の関を着想する。『五代集歌枕』に「相州歟あしがらのせき」と見え、『後撰集』の羇旅の歌をあげる。宗碩はその例歌に拠らず、「こまとめて袖うちはらふかげもなし」（『新古今集』巻第六　六七一）とその本歌「くるしくもふりくるあめかみわのさきさののわたりにいへもあらなくに」（『万葉集』巻第三　二六七）に拠ったと思われる。

何をしるしの三輪の杉むら

九七八　かきくらすさのゝワたりの雨の日に

この句も「くるしくもふりくるあめか」（右に引用）に拠る。「さのゝワたり」の所在地は和歌山県新宮市ではなく、奈良県桜井市として付ける。「三輪」に付ける語の中に「初瀬山　佐野の渡り」と二語が並んで見える（『随葉集』巻第六　名所部278）。すでに宗碩の時代には「みわのさき」は桜井市三輪であり、「佐野の渡り」をつけることが定着していたと思われる。

むろの八しまのけふりくらへん

二三　田上や薪こりつむ山ちかみ

『散木奇歌集』第三秋部に、

田上にて船にのりてやしまといふ所に霧のいぶせかりけるをみてよめる

四六九　川ぎりの煙と見えてたつなへになみわけかへるむろの八島に

とある。『歌枕名寄』巻第廿六　下野国「八嶋」の項にこの歌をあげて左注を付す。左注は歌の前書を引いて「然者彼田上に八嶋と云所ありとみえたり　室の字を付ることは下野の室八嶋にことよせていへる歟…」とある。「八しま」は近江と下野との両方にあることを踏まえて、「けふりくらへ」に「薪こりつむ」と付けた。

宗碩の名所句六〇句の中に、未勘国の名所を詠んだ句が三句ある。その中の「ことうら千鳥」の句は先に扱った。残る二句の付合の方法を窺ってみる。

綱手うちはへ舟も日なかし

一六　あしわかの浦めつらしき下もえに

『歌枕名寄未勘国下（巻第三十八）』の「葦若浦」の項に、

あしわかの浦にきよするしら波のしらしら君は我おもふとも

をあげる。この歌は『新勅撰和歌集』巻第十一　恋歌一「題しらず」中の六三一である。

『新勅撰集口実』に、

芦若の浦は称名院細流に、葦の若きに若の浦をよせたりと云々。きよするはよせ来る心也。哥の心は序歌にて明也。

とある。[32]『細流抄』には「…みるめはなく共立なから帰へきは面目なきよし也」とある。[33]

『源氏物語』若紫の巻に源氏の歌、

あしわかの浦にみるめはかたくともこは立ちながらかへる波かは

がある。『細流抄』はその注である。『新勅撰和歌集抄』には「あしわかの浦はたゞわかの浦の事也」とある。[34]宗碩は「綱手」の語に須磨の巻を想起し、「日なかし」の春に寄せて付けたか、と思われる。

月をそへはや水も影よし

三三七　音きけハいつしか秋のゆふは河

『歌枕名寄未勘国下（巻第三十八）』に「結八川」が見える。例歌は「わがひもをいもがてもちてゆふはかは」（『万葉集』巻第七）を初め、「紐を結ふ」に掛ける歌三首、「麻結ふ」に掛ける歌一首、その他三首が見える。宗碩の句は、秋の月が出て水面に映るのを待つ前句に流れる水の音を付ける。「水も影よし」は水底まで透ける清明な流れである。「そへはや」に「早」の意を汲みとって「いつしか」を付け、「ゆふは河」に「夕」を掛けて秋の夕べの静けさの中に時の流れを表現する。澄明な感覚の句である。

宗碩の名所句は本歌に拠って付ける場合、『万葉集』に拠る「藤はらの里」「明石のとなみ」の句があった。『続古今集』に拠る「あしうらの山」の句があり、『草根集』に拠る「ことうら千鳥」の句もあった。『源氏物語』若紫の巻に拠る「あしわかの浦」、関屋の巻に拠る「歎きのみ」の句があった。名所は本歌本説を重んじ、「寄せ」をもって付けるという師説を守っていると見られる。

（一二）

ここで、宗碩の名所への関心の深化についてまとめる。宗碩は永正三年（一五〇六）に『勅撰名所和歌抄出』を編んだ。この本に掲げない名所「西川」「ことうら」「金の御嶽」を詠んだ句が『名所句集』に見える。この三句はいずれも『宗碩連歌合』を選句資料とする。永正十七年（一五二〇）まで名所の知識見聞を一層広めていた証拠である。

未勘国の名所「あしわかの浦」「ゆふは河」の二句は『伊庭千句』を選句資料とする。未勘国の名所は現地が特定できないから、本歌本説に精通していなければ詠めない。『宗碩連歌合』が成立する永正末年から『伊庭千句』が成立する大永四年までの数年間にも名所研究を続行し、『伊庭千句』はその到達点とも見られる。大永元年の『住吉千句』では両吟の相手の聴雪が名所を二六詠むのに対し、宗碩は三五を詠む。大永二年『伊勢千句』では宗長が三七、宗碩は三六である。大永四年『伊庭千句』では三吟の各人の名所句数は聴雪二一、宗長二七、宗碩三四であった。

『名所句集』雑連歌下　第九の末尾近くに宗碩の句が四句並ぶ。『伊庭千句』の「葛城や」の句が初めで、次いで『宗碩連歌合』九十三番左、九十八番左と右の句である。連歌合左と右の両句の入集は六組一二句に及ぶが、左右並びの型での入集はこゝだけである。

心ハミえつかゝる山陰

左三三三　法にたれ絶す水くミなつミ川

いつしか道ハたゆる浅茅生

右三三四　法の跡をはるかに三井の寺ふりて

左の句は判詞に「水くミなつミ河面白候。山陰のよせよく思あハせられ候」（太田本）とある。『歌枕名寄』「夏箕河」の項には「鴨、山かけ」「山かけ、月」「しらゆふはな」「川せ」を詠む歌四首をあ

げる。『平安和歌歌枕地名索引』は「鴨」「をし」「卯の花」「しらゆふ花」を詠む歌七首をあげる。宗碩はこれらの例歌のいずれにも拠らず、謡曲『二人静』に拠ったと思われる。「心はみえつ」に義経を慕う静の心を、「山陰」にはツレの詞「川淀近き山陰の」の面影を窺わせる付合である。「菜つむ」の表現は『閑吟集』に見えるが勅撰集には見えない。

右の句は判詞に「三井の寺あさち本歌珍重候」（太田本）とある。本歌は『新古今和歌集』巻第十七　雑歌中に、

三井寺やけて後、すみ侍りける房をおもひやりてよめる　大僧正行尊

一六〇　すみなれし我が古郷はこの比や浅茅がはらに鶉鳴くらん

がある。三井寺は保安二年（一一二一）に焼失した。[35] 本歌に拠って四百年の昔を偲ぶ付合である。

神祇の名所句は宗祇の『独吟名所百韻』以来、宗牧の『賀茂社法楽独吟名所百韻』に至る展開がある。『宗長連歌合』八十九番左「春日野」、同右「石清水」はその系譜である。宗長は八十八番左に「ほとけにとをき」、同右に「すみそめの袖」の句を番えたが、釈教の名所句にはならなかった。『宗碩連歌合』は九十八番左右は釈教の名所句であったが、百番左右の神祇は名所句ではなかった。宗長、宗碩、宗牧等によって神祇、釈教の名所句を詠むまでになったと見られる。

おわりに

宗碩の入集句六〇句の中、『宗碩連歌合』大永三年本と『伊庭千句』との二作品で四四句入集することは、『名所句集』の編纂が大永四年を最重要期としていたことを窺わせる。この時期に存命する入集作者は宗長と宗碩である。宗長は大永四年三月『伊庭千句』に出座後、四月には駿河に向かい、十月まで各所に滞在している。[36] 宗碩は大永四年六月に能登へ向かい、翌年正月元旦は能登畠山氏の許で独吟百韻を賦す。帰洛は春も末ではなかったか。[37] 二人は旅の生活が主であって、句集を編む余裕があったとは思えない。『名所句集』は『竹林抄』の部立、七賢作者を倣っているが序跋を付さず、成立について何も語らない。句集の編者は一個人ではなく、協力者を擁する或る人物であったか、あるいは、或る人物が撰集を行いながら序跋を整え得なかったか、そのどちらかである。

『賀茂社法楽宗牧独吟名所百韻』の第四四句に「日くらしの野」を詠む。句頭には「大和」と注記する。「日くらしの野」は『歌枕名寄』に見えない。『八雲御抄巻第五　名所部』に「日ぐらしの山」が見えるが「筑紫歟。後撰。」と注記がある。[38] 永正から天文にかけての年代には、歌枕として例歌の稀な、所在地未詳の名所が連歌に詠まれる。こういう時代背景にあっても宗碩は本歌本説に拠って名所を詠む。そのあるものは実在しない歌枕であった。

今後の課題は、(1)主要な名所について、入集する句と入集しない句とを比較して選句の基準を考察すること。(2)『宗碩連歌合』の二類本、とくに太田本の意義は大きいと見られる。太田本を利用する本を探ること、である。

注

(1)　伊地知鉄男編『連歌論集　上』（一九八五年一一月発行　岩波文庫）七〇頁。

(2)　伊地知鉄男他編『俳諧大辞典』（昭和三十二年七月発行　明治書院）「名所百韻」の項。金子金治郎執筆。

（一三）

（一四）

（3）木藤才蔵　井本農一校注『連歌論集　俳論集』（昭和三十八年八月発行　岩波書店）五一頁。
（4）注（1）前掲書。八六頁。
（5）注（3）前掲書。二一三頁。
（6）伊地知鐵男編『連歌資料集2』（昭和五十二年七月発行　ゆまに書房）三二五頁。
（7）金子金治郎著『連歌論の研究』（昭和五十九年六月発行　桜楓社）九頁。
（8）木藤才蔵「松平文庫本『名所付合』考」（『連歌俳諧研究』第五十九号昭和五十五年七月発行）
（9）『筑波問答』（注（3）前掲書所収）九三頁。
（10）金子金治郎編『連歌貴重文献集成　第一集』（昭和五十三年六月発行勉誠社）四六八頁。
（11）木藤才蔵著『連歌新式の研究』（平成十一年四月発行　三弥井書店）
（12）中島光風著『上世歌学の研究』（昭和二十年一月発行　筑摩書房）二九五頁。
（13）吉田幸一　神作光一　橘りつ編『歌枕名寄六　古典文庫第三四五冊』（昭和五十年九月発行）一八頁。以下、本書八分冊に拠る。
（14）『新編国歌大観第二巻私撰集編』。以下、引用歌は本大観に拠る。
（15）田中裕　赤瀬信吾校注『新古今和歌集』（一九九二年一月発行　岩波書店）　久保田淳著『訳注藤原定家全歌集　上巻』（昭和六十年三月発行河出書房新社）
（16）福井久蔵著『校本菟玖波集新釈　上』（昭和五十六年二月発行　国書刊行会）一三四頁。
（17）『角川日本地名大辞典28　兵庫県』（昭和六十三年十月発行）
（18）横山重　金子金治郎編『新撰菟玖波集　実隆本』（昭和五十三年六月発行　角川書店）
（19）木藤才蔵編『随葉集　古典文庫第四三二冊』（昭和五十七年九月発行）以下、本書に拠る。
（20）『京都市の地名』（一九七九年九月発行　平凡社）以下、京都市内の名所は本書に拠る。
（21）『連歌総目録』（平成九年四月発行　明治書院）一四九頁。
（22）金子金治郎著『宗祇旅の記私注』（昭和四十五年九月発行　桜楓社）八二頁。
（23）ひめまつの会編著『平安和歌歌枕地名索引』（昭和四十七年二月発行大学堂書店）以下、本書に拠る。
（24）木藤才蔵著『連歌史論考下　増補改訂版』（平成五年五月発行　明治書院）一〇五六頁。
（25）和一冊二〇二函二六一号（『續類従　山田千句』）。付注本は金子金治郎著『連歌古注釋の研究』（昭和四十九年三月発行　角川書店）に拠る。
（26）『王朝文学　第十六号』（昭和四十四年六月発行　東洋大学王朝文学研究会）
（27）大阪俳文学研究会編『藻塩草本文篇』（昭和五十四年十二月発行　和泉書院）二二九頁。
（28）『角川日本地名大辞典26　京都府上巻』（昭和五十七年七月発行）一一七頁。
（29）拙著『宗碩と地方連歌―資料と研究―』（平成五年二月発行　笠間書院）
（30）『角川日本地名大辞典29　奈良県』（一九九〇年三月発行）三〇九頁。
（31）久曽神昇編『日本歌学大系　別巻一』（昭和四十一年十月発行　風間書房）四五三頁。
（32）・（34）大取一馬編著『新勅撰和歌集古注釈とその研究〔上〕〔下〕』（昭和六十一年三月発行　思文閣出版）四七六頁。一九八一頁。
（33）伊井春樹編『内閣文庫本細流抄』（昭和五十年二月発行　桜楓社）六四頁。
（35）『日本史総合年表』（平成十三年五月発行　吉川弘文館）
（36）鶴崎裕雄「宗長年譜稿」（『帝塚山学院短期大学研究年報』第四十四号一九九六年）
（37）『実隆公記』大永五年一月～三月の記事欠。四月一日条に「道堅・飯川〔国弘〕・宗碩等勧一盞」とある。
（38）久曽神昇著『校本八雲御抄とその研究』（昭和十四年九月発行　厚生閣）一八四頁。